

二〇二四年度 大妻中野中学校 第三回アドバンスト入試

二月二日午後 問題用紙

国語

座	席	番	号
			番

受	験	番	号
			番
			氏 名

受験上の注意

- (一) この問題用紙は表紙を含めて全部で11ページあります。
- (二) 試験開始後ただちにページ数を確認してください。
- (三) 問題用紙、解答用紙それぞれに座席番号と受験番号と氏名を忘れずに記入してください。
- (四) 試験時間は五十分です。
- (五) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (六) この試験は百点満点です。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(ただし、句読点や記号も一字に数えます。)

① 何も考えなければ、歩行者の目を楽しませるアートに見えるかもしれない。ときには愛らしい *1 相貌をもつケースさえあるから厄介だ。しかし、その意図に気づくと、都市は悪意に満ちている。私見によれば、一九九〇年代後半から、オウム真理教による地下鉄サリン事件を契機に、日本では他者への *2 不寛容とセキュリティ意識が増大し、監視カメラが普及するのと平行しながら、こうした排除系のアートやベンチが出現した。ハitek監視とローテクで物理的な装置である。

いち早く、都市社会学者のマイク・デイヴィスによる著作『要塞都市LA』(青土社、二〇〇一年/原著一九九〇年)は、セキュリティが優先されるアメリカの都市状況を指摘し、「サディズム的な街並み」の誕生を論じている。そして市は富裕層のために魅力的で上品な環境を創出する一方、二、三ブロック離れたところでは、「ホームレスや貧困層にとって公共施設や空間ができるだけ「住みにくい」ところになるよう、容赦ない戦いを繰り広げている」という。例えば、樽のように座面が膨らんだバス停の「浮浪者よけ」ベンチ、公園における頭上のスプリングラーの定期的な作動によって長居する人を水びたしにする、凝った飾りを施した囲いでゴミ漁りをさせない、あえて公衆トイレをほとんど設置しないといった対策などだ。アメリカの過防備都市化は、日本に先行していたのである。

新聞記事を調べると、排除ベンチについては九〇年代後半から関連した記事が散見される。1、世界女子ソフトボール大会を控えて、静岡県の富士宮市では、浅間大社に集まるホームレスを排除することが、警察署と地域関係者のあいだで決まった(『朝日新聞』一九九八年六月二〇日)。その「作戦会議」において、ベンチを撤去する案が出されたが、県の補助金でそれを設けていた市は「ベンチを撤去するには、補助金の返還や市民の賛意が必要」とコメントしている。なるほど、一度設置したベンチを簡単に除去できないならば、ベンチを改造し、仕切りを付加する選択肢がありうるだろう。はつきりと排除の目的に触れている記事もある。

JR秋田駅の自由通路において、ベンチにロープを張って、「使用禁止」の札を下げたが、それでもホームレスが寝ていたので、管理する市まちづくり整備室は、ベンチに仕切りを設け、横になれないようにすることを計画したという(『読売新聞』二〇〇二年二月四日)。なお、記者の神田誠司が、公園のベンチにひじかけ状の仕切りをつけて、わざわざ三等分していることが気になり、大阪市公園緑化部に質問したところ、以下のような回答をもらっている(「無粋なベンチの仕切り」『朝日新聞』二〇一四年五月一三日)。すなわち、「ベンチを寝床がわりにするホームレスの人数が増えた一九九八年ごろから、近隣住民からの要望でつけるようになった」というのだ。筆者が子どもの頃、すなわち一九七〇年代はまだ上野公園に傷痕軍人がいて、国家の戦争による犠牲者として見られていたのに対し、一九九〇年代からのホームレスは自己責任論が *3 跋扈し、迷惑な存在として排除の対象となる。

言うまでもなく、本来、ベンチは座るためにデザインされた*4プロダクトである。だが、通常は複数人で座ることも想定し、細長くなっていることによって、その上部で寝そべることも可能だ。これは本来、意図されていなかった用途かもしれない。だが、行き場を失ったホームレスにとっては、冷たい地面の上で寝ないですむ台として活用できる。そこで座るという役割だけを残して、寝そべることを不可能にしたのが、仕切り付きのベンチなのだ。増えはじめた頃のベンチをよく観察すると、仕切りは明らかに後から付加されたものが多く、②行政や管理者の公共空間に対する考え方の変化が*5可視化されていた。すなわち、誰もが自由に使えるはずの公共空間が、特定の層に対しては厳しい態度でのぞみ、排除をいとわないものに変容している。おそらく、通常の生活をしている人は、仕切りがついたことを深く考えなければ、その意図は意識されないだろう。言葉で「禁止」と、はっきり書いていないからだ。しかし、排除される側にとって、③そのメッセージは明快である。つまり、排除ベンチは、言語を介在しない、かたちのデザインによるコミュニケーションを行う。

禁止だと命令はしないが、なんとなく無意識のうちに行動を制限する。これは環境型の権力なのだ。アフォードダンスの概念は、環境が人間や動物に対して影響を与え、ふるまいをうながすことを意味するが、ここでは「させない」という動作の否定に用いられている。またデザインの分野において、アフォードダンスの視点が導入されると、すぐれたデザインとはその使い方を自然にアフォードするものという考え方となるだろう。例えば、ドアノブが円形になっていれば、深く考えなくても、人はそれを握ってまわすという風に。

④排除ベンチは「進化」し、やがて仕切りをあらかじめ備えたプロダクトが登場するようになった。コトブキなどのベンチのメーカーのホームページを調べると、こうした製品は様々に存在することが確認できる。また背もたれがなく、*6座板が弧を描いたり、膨らんだベンチは、仕切りがなくても安定して寝そべることでできないために、さらに座るという機能だけに特化される。運動ができる健康増進ベンチという名前で、きわめて不自然な造形を正当化するものも認められた。もちろん、体を伸ばすなどの運動はできるので、名称通りの役割をもつが、あん馬のように二つの*7把手をもつタイプは、仕切りベンチと同類である。ちなみに、製品の説明にホームレスを排除するためとは書かれていない（もし、その目的も記していれば、大バッシングを受けるだろう）。

ともあれ、ベンチに仕切りが存在すると、本来寝そべることは可能だったのに、それを拒否していることを気づかせる。2、極端に座板が細かったり、座板の代わりに棒状の部材を並べるような製品を開発すれば、そもそも仕切りが必要ない。こうしたデザインは、そこで寝そべることでできたかもしれないという想像力が働きにくい。だが、ベンチはベンチである以上、座るという機能は残る。ベンチはアートではなく、デザインされたプロダクトだからだ。したがって、人間にとって座りやすいかたちを追求するのもデザインだが、一方でホームレスに対し、いかに寝づらいものにするか、居心地を悪くするかを造形化するのもデザインなのである。だが、これをさらに「進化」させると、排除アートになるだろう。

おしゃれなカフェと一体化したTSUTAYA図書館など、指定管理者制度の導入によって公共施設の民営化は進んでいる。二〇〇九年に渋谷区が老朽化した宮下公園を、ネーミングライツ契約によって、ナイキパーク化する再開発がもちあがったとき、反対運動が起きた。ここも一九九〇年代頃からホームレスが集まり、小屋がつくられるようになっていた。だが、十分な説明がないまま、計画が進行し、改修費用を負担することによって、公共の場が大企業のものとなり、ホームレスが排除された。その後、同じ場所は本格的に商業施設と一体化した立体的な「公園」、すなわちミヤシタパークになっている。確かに税金を節約して人が賑わう場所が誕生した。しかし、



。あくまでも、お金を払って楽しめる人

現在、あちこちで⑤SDGs（「Y」な開発目標）やバリアフリーの理念が高らかに謳われている。特に前者は多くの自治体や企業で取り組むべきものになった。適当に都市名、もしくは企業名を入れて「SDGs」の言葉とあわせて検索すれば、いくらでも事例を挙げられるだろう。またダイバーシティ（多様性）やインクルーシブ（包摂的）などのキーワードも流行している。国連サミットで採択されたSDGsの説明を読むと、一七の開発目標として以下のようなものを掲げていた。例えば、「目標1 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」、「目標8 包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進する」、「目標10 各国内及び各国間の不平等を是正する」、「目標11 包摂的で安全かつ強靱で持続可能な都市及び人間居住を実現する」などである。しかし、実際に日本の都市で進行しているのは、⑥真逆の事態ではないか。目につくのは、商業化されたSDGsだ。「我々は貧困を終わらせることに成功する最初の世代になり得る」という宣言に向かうどころか、コロナ禍において格差はさらに増大し、排除ベンチや排除アートは貧困から目をそむけることに貢献している。そしてバリアフルな社会をめざしているかのようだ。

ホームレスが使いにくいベンチは、実は一般人にとっても座りにくい。大阪で派遣切れとなって野宿生活をする男性の言葉として、次の言葉が紹介されていた（田中洋史「横になれないベンチ」『読売新聞』二〇〇九年二月二〇日）。「社会どころか、公園のベンチにまで拒絶されているみたいだ」。これを書いた記者は、ひじかけタイプの仕切りがあるベンチに腰掛けると、少し窮屈に感じ、くつろげないことを確認している。

3、

こう記した。「時には横になって本を広げたい。肩を寄せ合って座りたい親子、恋人たちだっているだろう。誰でもゆつたりとくつろげてこそ、公園のベンチだと思う。様変わりするベンチの姿にギスギスした今の社会をかいま見るようで、寂しくてならない」。ベンチやアートだけではない。二〇〇五年の愛知万博の直前、おそらく外国人に見せないために、白川公園のダンボールハウスが強制的に排除された後、同じ場所に花が植えられ、緑を大切にという看板が掲げられたが、人に対しては厳しい処置だった。しかし、以前の風景を知らなければ、公園で起きたことはもうわからないだろう。

排除アートは、われわれが使えるはずだった場所を奪う。本来、広場や公園などの公共空間は、有料で入場するテーマパークと違い、未定義の部

分があり、様々な可能性に開かれている。それをあらかじめつぶすのが、排除アートなのだ。建築家の青木淳は、「原っぱと遊園地」という二つの空間モデルを提示している（『原っぱと遊園地——建築にとってその場の質とは何か』王国社、二〇〇四年）。前者は『ドラえもん』の漫画に登場するような土管が転がった空き地、後者はいわゆるテーマパークのようなものをイメージしたらよいだろう。原っぱは、特定の目的がなく出現したもので、子どもたちはそこで自ら考えて、遊び方を工夫する。一方、「遊園地」は何から何まで至れり尽くせりで遊び方があらかじめデザインされており、余白がない。青木は建築のデザインにおいても前者のモデルを推奨し、すべての形態と機能が一对一の関係になっていない自由さを好む。本来、公共空間も、⑦そのような場だろう。だが、排除ベンチや排除アートが導入されることによって、不測の事態が起きない「遊園地」に変貌する。

他者を排除していくと、誰にもやさしくない都市になる。われわれはすでに気づかないうちに、そうした環境に順応させられているかもしれない。筆者はこんな体験をしたことがある。雨の日だったので、東京駅から大手町の日本経済新聞社東京本社ビルまで、地下鉄を一〇分近く歩いてしたが、途中でベンチがひとつもないことに気がついた。もちろん、お金を払えば、座れるカフェは存在した。が、無料で休める場所はない。排除ベンチは、拒否のデザインである。

Z

が、おそらく高齢者や妊婦、体の調子が悪い人は、なぜこれだけ広い地下街を歩いても、ベンチがないのだろうと気づくはずだ。したがって、これはホームレスだけの問題ではない。実はどんな健常者であろうとも、潜在的に排除される可能性にさらされる都市空間である。だが、本当にそうした環境でよいのだろうか。

個人的な話だが、リスボン建築トリエンナーレ2007において、筆者が日本セクションのキュレーションを担当し、設営の現場に立ち会ったとき、自腹でベンチを購入したことがある。一九九八年のリスボン万博にも使われた広い会場を歩いてまわったところ、展示ばかりで、ほとんど座る場所がなかったからだ。そこでまだ日本のエリアは空間に余裕があったことから、ホームセンターで売っていた安物だが、白いベンチを置いた。会期が始まると、実際にそこで腰掛けて休む人が続出していたので、ささやかな空間への介入でも意義はあったと思う。

最後に岡本太郎の「坐ることを拒否する椅子」（一九六三年）をとりあげよう。彼は巨大な壁画や屋外彫刻のように、公共空間に設置され、誰も所有しないアートを望んだが、これは題名通り、座面が丸かったり、ハート型だったり、顔がついているなど、座りにくい陶製の椅子である。もちろん、これは他者の排除を狙ったわけではない。生ぬるく快適に生きると人間が飼いならされて、ダメになるから、山の中の切り株のような椅子を

つくり、大衆社会に送り込んだものだ。いわば反語的なメッセージである。座るな、ではなく、それでも果敢に座ってみろ、と訴えるものだ。一方、彼は、弱者である病人や高齢者は座りやすい椅子を使うべきだと述べたという (https://www.1101.com/tenoshimi/2017_aw/taro/2017-11-09.html)。岡本の時代に排除アートは存在しなかった。「坐ることを拒否する椅子」は、*8 モダニズムの機能主義に対する批判でもある。一方で排除アートは「させない」という機能を担^{にな}わされた造形だ。⑧まずはわれわれが街に出かけ、他者の視点をもつて、知らないうちに増えている排除アートを発見・体験し、都市の不寛容を知ることから、意識を変えていく必要がある。

(五十嵐太郎『誰のための排除アート? ——不寛容と自己責任論』岩波ブックレットより)
*なお、問題の都合上、本文を省略したり変えたりした部分があります。

〔注〕

- *1 相貌…物事のありさま、様子。
- *2 不寛容…心がせまく、人の言動を受け入れないこと。他の罪や欠点などをきびしくとがめだてすること。
- *3 跋扈…思うままにふるまい、のさばりはびこること。
- *4 プロダクト…製品、製作物。
- *5 可視化…目に見えないデータや事象を目に見える状態にする行為のこと。
- *6 座板…木製の椅子やベンチなどの腰掛けの、尻を乗せる部分の板材のこと。
- *7 把手…手に握る部分。取っ手。
- *8 モダニズム…二〇世紀初頭に各分野で起こった実験的な芸術運動。モダンアート。

問一 — 部①「何も考えなければ、歩行者の目を楽しませるアートに見えるかもしれない。」とありますが、何について「見えるかもしれない」と述べているか。本文中から十一字で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

問二 1 3 に入る最も適切な言葉をそれぞれ次のア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
ア. そして イ. まるで ウ. しかし エ. ところで オ. 例えば

問三

——部②「行政や管理者の公共空間に対する考え方」とありますが、どのような考え方に変わったのですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 公共のものであるベンチに非常に強固な仕切りをつけたことで、従来よりも頑丈で壊れにくいベンチを作るという考え方。
- イ. 公共のものであるベンチに近隣住民の要望があった仕切りを付加することで、市民の意見の正しさを印象づけるという考え方。
- ウ. 公共のものとして一部の人が使えなかったベンチに仕切りをつけることで、誰にも自由に開放している姿勢を見せるという考え方。
- エ. 公共のものとして誰でも自由に使えたベンチに仕切りを付加することで、ある特定の層に対して自由に使えなくさせるという考え方。

問四

——部③「そのメッセージ」の説明として次の文が正しくなるように、 (1)、(2)の中に入る語句を本文中から探し、(1)は二十字、(2)は四字で抜き出さない。

仕切り付きのベンチは、(1) 二十字 けれども、仕切りをつけることでベンチの上で (2) 四字 ことをさせないというメッセージ。

問五

——部④「排除ベンチは『進化』し」ている具体例として適切でないものを次のベンチの資料ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア.



イ.



ウ.



エ.



問六 Xに入る語句として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 誰にでも開かれているわけではない
- イ. 誰にでも開かれている場所になった
- ウ. ホームレスが完全に排除されているわけではない
- エ. ホームレスが全然排除されていない場所になった

問七 — 部⑤「SDGs（Y）【な開発目標】」とありますが、Yに入る最も適切な言葉を本文中から四字で探し、そのまま抜き出して答えなさい。

問八 — 部⑥「真逆の事態ではないか。」とありますが、「真逆な事態」とはどのような事態のことですか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. SDGsの理念を象徴する排除ベンチや排除アートによって、SDGsの本来の意味からかけ離れたバリアフリーの理念をめざす事態。
- イ. 格差がさらに増大し、排除ベンチや排除アートによって貧困を見て見ぬふりをして、バリアフルな社会をめざしているかのような事態。
- ウ. 商業化されたSDGsによって、排除ベンチや排除アートがあらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる可能性があるという事態。
- エ. 多くの自治体や企業の取り組みによって、すべての人々が安全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用を促進できる事態。

問九 — 部⑦「そのような場」とありますが、具体的に言いかえるとどのような場のことですか。「場」に続くように、本文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問十 Zには次のア～ウの文が入ります。文意が通るように正しい順序に並べ替え、記号で答えなさい。

- ア. そもそも存在しなければ、悪意あるデザインも批判されないだろう。
- イ. しかし、ベンチをなくせば、寝させないことにも気づかない。
- ウ. つまり、何も置かないという選択肢である。

問十一 — 部⑧「まずはわれわれが街に出かけ、他者の視点をもって、知らないうちに増えている排除アートを発見・体験し、都市の不寛容を知ることから、意識を変えていく必要がある。」とありますが、「われわれ」が「意識を変えていく必要がある」と筆者が考えているのはなぜですか。「都市」、「他者」という言葉を必ず使って四十字以上五十字以内で答えなさい。

問十二 次の会話は、この文章を読んだA～Hさんによるものです。本文の内容にそった会話として最も適切だといえるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア.

〈Aさん〉「居心地が悪く短時間の利用をうながすデザインの本チは、皆が平等に利用できるように工夫されていると思いました。」
〈Bさん〉「なるほど。わざと座り心地を悪くしたり特定の人を排除する本チは、利用する人に応じて使い分けられいいことだね。」

イ.

〈Cさん〉「白川公園のダンボールハウスの排除の例から、私たちも気づかないうちに環境に順応させられているかもしれないかも。」
〈Dさん〉「でも、公共施設の民営化によって公園にいるホームレスの人が公園からいなくなってくれと、皆が安心して利用できるよね。」

ウ.

〈Eさん〉『『ドラえもん』の漫画に出てくる土管のように、都市をさまざまな想像力をめぐるせて自由に使えたらいいよね。』
〈Fさん〉「そうだね。排除ベンチから、誰にとっても住みやすい街とは何かと想像力をめぐるせることが大切だと思います。」

エ.

〈Gさん〉「排除ベンチは戦後から一九九〇年代にかけてホームレスや貧困層の人達への排除の目的として置かれていたみたいだね。」
〈Hさん〉「確かに、岡本太郎の『^{すわ}坐ることを拒否する椅子』は排除ベンチとして大衆社会への反語的なメッセージが込められているよね。」

三 次の各問いに答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の――部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字はその読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 現場は混乱し、シユウシユウがつかなくなっている。
- ② 本番で自分の最大限の力をハツキする。
- ③ 私の父は、都内の銀行にツトめている。
- ④ 日本は、外国から多くのコクモツを輸入している。
- ⑤ 旅の思い出や記録をキコウブンにして残す。
- ⑥ 私の妹は、とても明朗な性格である。
- ⑦ 電話でお客様からの注文を承る。
- ⑧ 近年、科学の分野は成長が著しい。
- ⑨ 彼女は、自分の失敗を潔く受け止めた。
- ⑩ 彼の議論は、理想ばかりで現実を見ない机上の空論だ。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問二 次の(1)～(5)の文章には慣用句が含まれています。空欄□に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。なお、答えはすべて体の一部です。

- (1) 野球の試合で、地元のチームに□を入れて応援する。
- (2) 教授は、いつも教室の一番前の席に座っている学生に、□をかけている。
- (3) 新たなことにチャレンジしようとするものの、失敗を恐れ、二の□を踏む。
- (4) 彼女は時々、□が浮くようなお世辞を言う。
- (5) 試合で相手チームに大差をつけ、□を明かした。

C 文法・言葉づかいに関する問題

問三 次の(1)・(2)の各グループの中には、――部の性質が他とはちがっているものが一つずつあります。それぞれ他とはちがっているものはどれかを考え、ア～エの記号で答えなさい。

(1) ア. そろそろ桜の咲く季節が来る。

イ. 机の上に置いてあったペンがなくなった。

ウ. 先日訪れた旅行先は、海の美しい町だった。

エ. この本は、私の買った本だ。

(2) ア. 綿あめのような雲が浮かんでいる。

イ. 彼は、象のような大きな体格をしている。

ウ. チョコレートのような甘いお菓子が好きだ。

エ. 彼女はまるで魚のような泳ぎをする。

問四 次の電話による会話の一部を読んで、あとの問いに答えなさい。

花子 長らくごぶさたしておりますが、山田先生はお元気でいらっしゃいますか。

太郎 はい、元気しております。

花子 そうですか。それを聞いて安心しました。先生に代わっていただきたいのですが、先生は今、ご在【 】でしょうか。

太郎 すみません。父は今、家にいらっしゃいません。

花子 そうですか。実は、来月同窓会を開くこととなり、先生にぜひ出席していただきたいと思い、お電話致しました。

詳しいことは、後日、またお電話 A さしあげたいと思いますので、先生によりしく B お伝えください。

太郎 わかりました。伝えておきます。

(1) 敬語（相手や目上の人を敬うことば）の使い方の間違っている部分を六字で抜き出し、正しい敬語表現に直しなさい。

(2) 敬語を使わなければならないのに使っていない部分を三字で抜き出し、正しい敬語表現に直しなさい。

(3) 〓 部が、「家にいる」という意味の熟語になるように、【 】に入る言葉を漢字一字で答えなさい。

(4) — 部 A・B の敬語はそれぞれ、誰に向けての敬意を表していますか。最も適切な人物をそれぞれ次のア～ウの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア. 花子 イ. 太郎 ウ. 山田先生

問題は以上です

